

昭和二十五年八月

栃木県那須郡西那須野町
三島に住所を定むる

昭和五十三年

栃木県土木事務所に勤務
する傍ら二級建築士の資
格を得ると共に土地家屋

調査士の資格も取得す
土木事務所を退職し独立
して建設関係の会社を設
立、今日に至る

昭和三十七年

(栃木県 野沢 芳夫)

シベリア抑留記

栃木県 前沢 韶

一

1 栃木県下都賀郡豊田村上初田に出生(父、
母、兄弟七人)

二

2 昭和十六年 県立栃木農学校卒 農業従事

1 昭和十九年十一月 宇都宮三六部隊入営

一週間後出発

小銃五人に一丁 帯剣

竹の水筒 地下足袋

十二月初 陣二九九三部隊入隊

陣師団満州へ移動 小

田部隊銭化店入り

石頭予備士官学校入校

ソ軍侵攻を教育隊で知

る三千六百人の候補生

3 同年七月二日

二十年八月九日

二隊となる

イ 学校長 小松大佐（後・伊藤少佐）指揮
イ隊 東京城方面 出陣

ロ 教育主任 荒木少佐 指揮
ロ隊 牡

丹江方面守備 出陣

私は伊藤隊配属 八月十一日夜、雨の中を
一文字山に向け出発

八月十二日 ソ連迎撃のタコ壺を掘る

同月十三日 東京城へ転進

同月十四日 爾站^{アルシヤン}へ 命令系統が次々変更

同月十七日夜 電話で停戦命令受ける

同月十八日 重火器、重要書類破棄処分

同月十九日 大休止なしの行軍続く、行軍

の先と後尾十キロにもなる

同月二十日午後 終戦の詔書^{ヒガン}を聞く

沙河^{サカエ}沿飛行場で聞く 皆号泣するも混乱なし

三

1 武装解除

2 武装解除後、敦化に終結、集団生活帰国を

待つ

3 かつて幹部候補生だった者の集まりらしく
整然としていた

四

1 武装解除は自主的であった為混乱なし

2 東京ダモイと乗車後、この汽車は北へ向つ
ているという候補生がいて混乱した

3 昭和二十年十一月十五日、ホルモリン第五
分所

五

1 収容所の移動は少なかった

2 発疹チフスの発生は聞かなかったが、シラ
ミの発生著しく、眠りを妨げられた

抑留一年後あたりから衣類の高温消毒始ま
る。入浴は月一〜二回か

3 三百人くらい

六

1 森林伐採運搬、建築、路盤構築

2 ノルマが課せられ監督から口やかましく言

われたが罰を受けた事はない

3 丸木の柱を立て丸木を削ってはめ込む建築様式に従事した時、柱に土を寄せずに水を注ぎ水でもたせたので仕事がかどったが、暖かくなって家が歪まなかったか？

4 とにかく年中腹が減っているから力も入らないし、ふらふらの状態での作業は惨めだった

七

1 収容所長から作業に関する指示があったと思うが細部は知らない

2 労役に堪えられない虚弱者はオカと呼ばれ、別の収容所へ

3 健康を保つには栄養、衛生、休養が基本だが、どれも劣悪だった

4 朝の作業出発時の点呼の遅さには閉口したが、衣類は次第に良くなってきた

6 皮付きコーリヤン、大豆、粉の配給には参ったが、水筒に入れ木の枝で皮を剥ぐ形ばか

りの三食

炊事当番者は日本人の食慣行に考慮、夜に重きを置いた。魚は抑留中幾度かあったが米飯肉は知らない

7 マイナス三〇度以下になると作業中止。昭和二十三年度後半よりノルマ達成者（ハラシヨラポータ）に休養あり
休日はほとんど寝て過ごす 人により作りの将棋をする

8 居住舎、食堂兼調理場、浴場、医務室、滅菌室

9 日本新聞が配布、日本の国状等が知らされ、共産党へ入党呼びかけられた

10 私の収容所では当初より自主管理であったので特別な問題なし

八

11 懲罰の体験なし
1 私はもともと農家の生まれ、子供の時から農事を手伝い、それなりに体が鍛えられてい

た、人としてやるべき事や、やってはならない事を厳しく教えられていた

2 人間、どんな境遇であれ、今の仕事に興味を持ち、環境に順応する心構えと努力があれば乗り越えられると思う

九

1 ホルモリン二〇五収容所

2 ホルモリンよりバーム鉄道

3 円滑であった

4 船内生活は少しもめた

5 昭和二十四年八月中旬帰国

十

1 幸いにも幾ばくかの土地を持つ農家の長男のため、出遅れ感は少しあったが、大事なし

2 辛い四年の抑留ではあったが得難い人生経験でもあった

人間万事塞翁が馬、しみじみ思う今日

補足

入ソ 昭和二十年十一月

抑留 ホルモリン地区 道路工事、伐採、鉄道建設

引揚船名 明優丸

上陸 舞鶴

健康状態 現在も良好であり、耕運機の運転など自由自在である。